



# 名前で呼び合うサルたち

コモンマーモセットは、南米に生息する小型のサルで、おしゃべり好きで知られる。口笛や鳥のさえずりに似た音、細かく震える音など、様々な声色を持つ。鳴き声を出すのは、自分の縄張りを守るとき、食べ物の発見や迫る危険を仲間知らせるとき、そして、鬱蒼とした森の中で家族を探するときなどだ。

しかも最近の研究によれば、彼らは、私たち人間が名前呼び合うのと同じように、呼びかける相手によって鳴き声を使い分けているという。人間以外の霊長類としては初めて、相手ごとに異なる呼びかけ声（人間でいえば相手の名前）を使っていることが分かったのだ。

これまで、意思疎通に名前を使うことが知られる生き物は、人間、イルカ、オウムのみだったが、今年6月、アフリカゾウも名前を使っている可能性があるという研究報告があった。人工知能を搭載したソフトウェアを使い、ゾウの低い鳴き声のなかの微細なパターンを検出することで、この発見に至ったのだ。

続いて先月、学術誌『Science』に掲載されたのが、別の研究チームが同じく人工知能を使い、コモンマーモセットの鳴き声のなかに、相手ごとに異なる呼びかけ声があるという発見だった。こうした研究は、動物の意思伝達を高度な解析ツールを用いて解読しようとする、科学研究の新たな潮流の一端であり、言語の起源を解き明かす糸口となる可能性もある。仲間同士で名前を付け合うこうしたコミュニケーションは、これまでの研究者たちの想像を超えて、様々な動物に広く見られることなのかもしれない。

(中略)

これまでの研究で名前を使っていると判明した生き物は、いずれも社会性が強く、群れで暮らしている。そうした特質こそが、名前を使う行動を生み出したのかもしれない。

ウィットマイヤー博士は、マーモセットについてこう述べている。「個体間の関係性こそが、彼らの本質を形作っており、そうした状況では、名前が非常に役立つのも理解できる」

Emily Anthes. "These Monkeys Call One Another by Name." *New York Times*. September 21, 2024. (エミリー・アンテス著 「名前で呼び合うサルたち」『ニューヨーク・タイムズ』 2024年9月21日)



森狙仙 《石燈籠に猿》(部分) ミネアポリス美術館